植民地朝鮮における「皇国臣民化政策」とミッション・スクール
—神社参拝の強要を端緒として—

李 省 展

1 資料
Korea Mission Materials of the PCUSA.
（米国長老派歴史協会所収朝鮮宣教関連資料）
富坂キリスト教センター編『日韓キリスト教関係史資料Ⅱ』新教出版社、1995年。

2 神社参拝問題と皇民化政策
崇実専門学校校長マッキューン等の参拝拒否（１９３５年１１月１４日）
南次郎総督就任（３６年８月５日）朝鮮統治の目標は「第一に朝鮮に陛下の行幸を仰ぐことで、第二は朝鮮に徴兵制を施くこと」
日中戦争（１９３７年７月７日～）、崇実専門学校閉校（１９３８年１０月）、外国人宣教師全員出国（１９４２年１０月）

3 前史（平壌VS．ソウル）ーなぜキリスト教か？ なぜ平壌なのか？
a コンパウンドの比較 地方都市の自己完結的なキリスト教コミュニティと首都的性格
（別紙参照、平壌：１９３０年頃の伝道拠点風景 「東洋のエルサレム」、 ソウル：貞同「新文化の揺籃地」『敬新八十年略史』）
b 朝鮮に一つのキリスト教大学設立構想（１９１２年～）
・福音主義的性格（Evangelical）と世俗主義的傾向(Secular)
（別紙：拙稿「宣教関連資料からみた植民地朝鮮のキリスト教大学設立構想」『恵泉女学園短期大学 英文学科 研究紀要』第３１号、１９９８年）
・日本の植民地教育を認識した上での（植民地教育との競合）、連合大学を頂点とする朝鮮全土におけるキリスト教教育の再編 ー延禧専門学校（ソウル）に縮小
c 宗教と教育の分離政策と「改正私立学校規則」（１９１５年3月）
「改正私立学校規則」：宣教師の存在理由を問われる問題
①私立学校の総督府による認可 ②正規の教育課程を遵守（聖書科目・宗教儀式の禁止）③すでに認可を受けた学校には１０年間の猶予期間
平壌：モフェット（S.A.Moffett）「宣教の自由を確保するために先達は血を流し、殉教したのである」、ベアード（W.M.Baird）「宗教と教育を分離した政府の規則のもとで学校を運営するのが正しいとは思わない…閉校するほうが望ましい」
ソウル：ゲェンソー（J.F.Genso）、儆新学校校長・クーンス（E.W.Koons）
「総督府の認可を希望するすべての学校に認可申請の許可を与えることをミッション・ボードに要求する」（上級学校への進学、学生募集での不利）

4 ３０年代後半のキリスト教学校の状況

３０年代後半にはキリスト教学校の生徒合計は過去最高の約１０万名。（１９３９年には三分の一の学齢期の児童が初等教育の機会を得ていた）教育熱の高まり。
敬新（ソウル）：６００名の志願者、１００名合格（１９３８）。 崇実（平壌）：５１０名の志願者、１１０名の合格者。英実（江界）：１９３５年までの平均学生数が５０－７０が１９３６年には１２０名。（各学校年次報告書）

5 神社参拝問題の経緯

・３２年9月１７日ー満州出征戦没将士慰霊祭にて平壌キリスト教系学校１０校（？）が慰霊祭に不参加「キリスト教学校生徒は他宗教の式典に参列する事許さず」（長老教会決議：9月９～１６日）を理由に、長老派・メソジストは共同歩調「国民的儀式に今後仏式は廃止」（『基督申報』１９３２年１２月１４日）
・３５年１１月１４日ー平南道中等学校校長会議 で平安南道知事、平壌神社参拝を命令する。長老派の崇実中・専門学校校長マッキューン、崇義女子中スヌーク（V. L. Snook）校長代理（スヌークは当日不在、通説は誤り：ロブ女史を駅まで見送りに行っていた）、安息教順安義明中校長リーが参拝を拒否。メソジストの男子校・女子校の校長は参拝（その後メソジストは教団として３７年に、国家儀式であるという非宗教論を受け入れる）（From G.S.McCune to C.B.McAfee 1935.12.20）。キリスト教側は神社参拝問題では当初から分裂。長老派の延禧専門学校、セブランス医学専門学校、貞信、儆新（ソウル）は参拝。 「すでに内地、台湾、鮮内の他地方においては凡ての基督教系の学校がよく此の点を理解して神社参拝を実行しているのでありまして、平壌の長老派系学校の一部及安息派系学校のみがこれを理解し得ないということは遺憾に考えるのです」（河野平南内務部長声明、３６年1月１５日）
・マッキューン罷免（３６年1月２０日）スヌーク罷免（2月２２日）
・総督府の立場ー①基督教主義学校の生徒といえどもすべての学生は神社参拝する
②学校長の宣教師も参加すべきこと（総督府学務局、３５年１２月３１日）
「神社は…国家公共の施設、宗教的意義をもつものではない。…国法上、神社と宗教はまったくその観念を別にしている」（総督府学務局長、３６年4月１０）
・世俗教育から撤退するという朝鮮ミッション決議案採択（６９対１６、３６年7月1日）
・ 決議案の再確認と重要事項の確認（1）連合教育事業である延禧専門学校、セブ

ランス医学専門学校から１９３９年３月をもって撤退する 。(2) 儆新学校が朝鮮人創立者を立て、宣教師ならびに宣教本部の管轄から離脱したことは遺憾である。

・平壌の三校は３８年３月で閉校、朝鮮人側に引き継ぐ動きがあったが、「崇実」などの名前は使わせない意思を表明

・宣川、ソウル、大邱の諸校はミッションの決議にも関わらず、朝鮮の実業家・教育者によって引き継がれていく。

6　平壌とソウルの宣教師の言説

平壌：

マッキューン「私の心は平安で、神は近くにいらっしゃった」「主の御腕に抱かれ、神が最後まで導かれる」「厳しい尋問の間も主の実在をこれほどまではっきりと実感した事はなかった」(From McCune to McAfee 1935.12.20.)「総督府との関係での神社問題においては、神が私に澄んだ良心を下さったことに感謝している。私がこの立場を貫くことによって、私の地位が奪われ、朝鮮より追放されても、獄に入ろうとも、凶弾にたおれようとも、主の平安が私を支配している」(From McCune to McAfee1935.12.30.)

ホルドクロフト(J.G.Holdcroft、朝鮮ミッション実行委員会議長)

「これらの儀式が宗教的であるとするならばすべての宣教師がよき相談者、友、朝鮮のキリスト教会の指導者として教会を援助し、その信仰と未来の教会のあり方を守らねばならない」(From Holdcroft to Mcafee 1935.11.22.)「日本の教育は、結局、日本臣民をつくろうとするもの…臣民として忠実であるよう訓練するのが目的…キリスト者としての証を破壊するような妥協をし、非キリスト教的政府と協力して、ミッションが教育を行うことは、果たして、それ自体可能なことだろうか」(From Holdcroft to Rev. James H. Nicol 1935.9.27.)「学校を一つあるいは全部失っても、全教会を失うべきではない」(From Holdcroft to McAfee 1936.4.27.)

ソウル：

アンダーウッド「私は国家儀式としての神社を受け入れる。それによって神の命令を犯しているとは思わない。朝鮮の基督教は、似非民族主義におかされてはならない。…現在は儀礼的尊敬を表すのみである。…もし総督府が奉納を要求したり、学校内に神社のようなものを建てようとするなら反対する。今が決定的な時期だとは思えない」(From H.H. Underwood to W.A.Linton 1936.1.28.)

7　資料分析からみえてきたいくつかの視点

A 神社参拝（祖先崇拝）＝偶像礼拝　朝鮮の儒教（日本との思想・宗教的背景の違い）との対抗での宣教を展開する上で、祖先崇拝を徹底して退けた。神社参拝を容認すると祖先崇拝を認めることになる。

B 植民地朝鮮のキリスト教史における一貫した、平壌、ソウルという二つの中心をもつ楕円の構図の存在。

① 信仰の傾向　平壌：福音主義的（根本主義的）
　　ソウル：自由主義的

②教育的特質　平壌：知識のあるキリスト者の養成（キリスト教コミュニティの存在）
　　宣教重視（時に学校より教会重視）
　　ソウル：近代文化・教育重視、非キリスト者の教育をも視野に入れる

③権力との関係　平壌：対抗的、非妥協的
　　ソウル：現実的、妥協的

（権力中枢との距離の差もあるが、朝鮮においては、福音主義的要素が権力と対抗的になるのは統治権力そのものに宗教的要素が織り込まれているからと考えられる）

④コミュニティの特質　（なぜ平壌？）

Pyenyang will probably be the first place which will be ordered out. That is because the Christian schools, college and two academies are so prominent relatively. In Seoul they do not make so much of the whole life of the city, and in smaller places the officials have not troubled us so much, those in Syonchun, for instance never having ordered the Christian Schools to attend ceremonies.　(From Holdcroft to McAfee 1935.7.4.)

C　教育史的理解

日本政府は初等教育を自らの一義的な責任と考えている。したがってミッションや外国人による初等教育はあまり望ましいと思われていない。朝鮮ミッションのそのような姿勢はミッションスクールを廃校にさせる機会を与えるに過ぎない。(Summary report of investigation of the shrine problem in Korea)

皇民化政策の推進には教育の掌握が必要。(「内地」と比較すると、初等教育における相対的なキリスト教学校の占める役割の重要度の違い)

D　宣教師と朝鮮人キリスト者との関係

ホルドクロフト等は天皇制植民地支配の本質を見据えていたが、長老派の、一連の自主閉校の動きは、結果として、統治権力が意図するように、朝鮮人キリスト者・民衆と長老派宣教師を乖離させることとなる。